つなぎ 45

2014年夏号
平成26年7月発行
第13巻第1号
（通巻45号）

地域医療を考えるペガサス情報誌

Special

介護職の可能性。

自立支援の専門家「介護職員」を育て活かしていく。

Pegasus Tsubasa

超高齢社会を迎え、高齢者の生活を支える
介護職の役割がより重要になってきた。
介護職員は、生活支援を必要としている方の
食事・排泄・入浴・更衣をはじめ、
さまざまな日常生活を援助し、
その人らしく生きられるように
「自立」を促すスペシャリストである。
そこには、患者さまやご利用者、
ご家族の気持ちを受け止める理解力や想像力、
そして自立支援を促す技術や知識が求められる。
ペガサスグループでは介護職員の教育に力を注ぎ、

介護福祉士・リーダー
松浦 睦

介護福祉士
松本さつき

介護福祉士・管理者
吉井宗広

馬場記念病院、ペガサスリハビリテーション病院、
介護療養型老人保健施設、
通所リハビリテーションセンター、
デイサービスセンター、ヘルパーセンター、
サービス付き高齢者向け住宅、グループホームと、
多岐にわたるステージにそれぞれ介護職員を配置。
なかには事業所や部署の管理者も誕生している。
介護職員がどのように、
患者さまやご利用者を支えているか。
その一部を紹介しつつ、
介護職の役割と可能性を考えていきたい。

介護福祉士
田浦嘉隆

介護福祉士・リーダー
堀 晶子

法人本部企画運営局・局長
田中恭子

Special

介護職だからこそできることがある。

ペガサスグループのさまざまなステージで活躍する介護職員。まずはその一人、ペガサス通所リハビリテーションセンターの管理・運営を任されている吉井宗広（介護福祉士）の仕事を通じて、介護職員の役割と使命を探っていきたい。

理事長面談で打ち明けた悩み。

「介護職員が〈生活機能訓練の支援者〉であることを、ご利用者にわかってほしい。でも、なかなかうまく伝える方法が見つかりません」。4年前、理事長面談でそう訴えたのは、ペガサス通所リハビリテーションセンター（※）の管理者・吉井宗広（介護福祉士）である。

吉井が思いきって理事長に悩みを打ち明けた真意はどこにあるのだろうか。

そもそも通所リハビリテーションセンターとは、ご自宅で生活をしながらセンターに通い、回復した身体的機能の確認や改善を行いながら、より自立した生活へと繋いでいただくところである。ご利用者の自立支援に情熱を燃やす吉井は葛藤を抱えていた。それはご利用者から介護職員が支援する生活機能訓練について正しく理解されていないことだ。

リハビリテーション医療は、医師をはじめ、セラピスト（理学療法士・作業療法士・言語聴覚士）や看護師、栄養士、介護職員など異なる職種がチームを組んで、患者さまの身体的機能を高め、社会復帰を促していく。そのチームのなかで、生活にもっとも身近な介護職員は、訓練によって改善された身体機能を、生活に定着させていく役割を担う。たとえば、食事、着替え、トイレなど日常生活のお世話を通じて、ご本人が〈できるようになった機能〉を反復練習し、残存能力も引き出しながら、より快適に生活できるようにサポートしていく。しかしながら、こうした介護職員の役割はあまり一般にはよく認知されていない。介護職員は「生活のお世話係」ととらえている方が多いことも事実だ。

吉井の悩みにじっと耳を傾けていた馬場武彦（社会医療法人ペガサス理事長）は、即座

に決断し、こう語った。「それなら、介護福祉士という国家資格とは別に、ペガサス独自の認定資格制度を設けよう」。実はペガサス法人内においても、かねてより通所リハビリテーションセンターにおける生活機能訓練の充実について検討していた。ご利用者の自立支援を促進するには、生活に根ざした日常生活訓練が欠かせない。新たな資格制度も視野に入れ、職員の機能訓練に対するスキルの向上を考えていたのだ。

それからまもなく、ペガサスに「認定機能訓練士」の資格が創設され、第1回認定試験が行われた。法人独自の認定資格だからこそ、試験内容も成績評価も厳密でなくてはならない。そう判断した法人本部は理学療法士の国家試験に準じる筆記試験・実技試験を行い、ペガサスの理学療法士が試験官を務めることを定めた。第1回試験ではペガサス職員のなかから50名が挑戦し、合格者は吉井を含むわずか2名。吉井はペガサスグループで第一号に認定された。

首から下げた「認定機能訓練士」のストラップを見せて、「これがあるだけで、ご利用者との信頼関係が深まり、より密度の濃い機能訓練を行えるようになりました」と吉井は満足気に語る。

※ペガサス通所リハビリテーションセンターは、平成26年4月より、ペガサスデイケアセンターから名称変更した。ここでは便宜上、ペガサス通所リハビリテーションセンターの名称で統一して記載する。

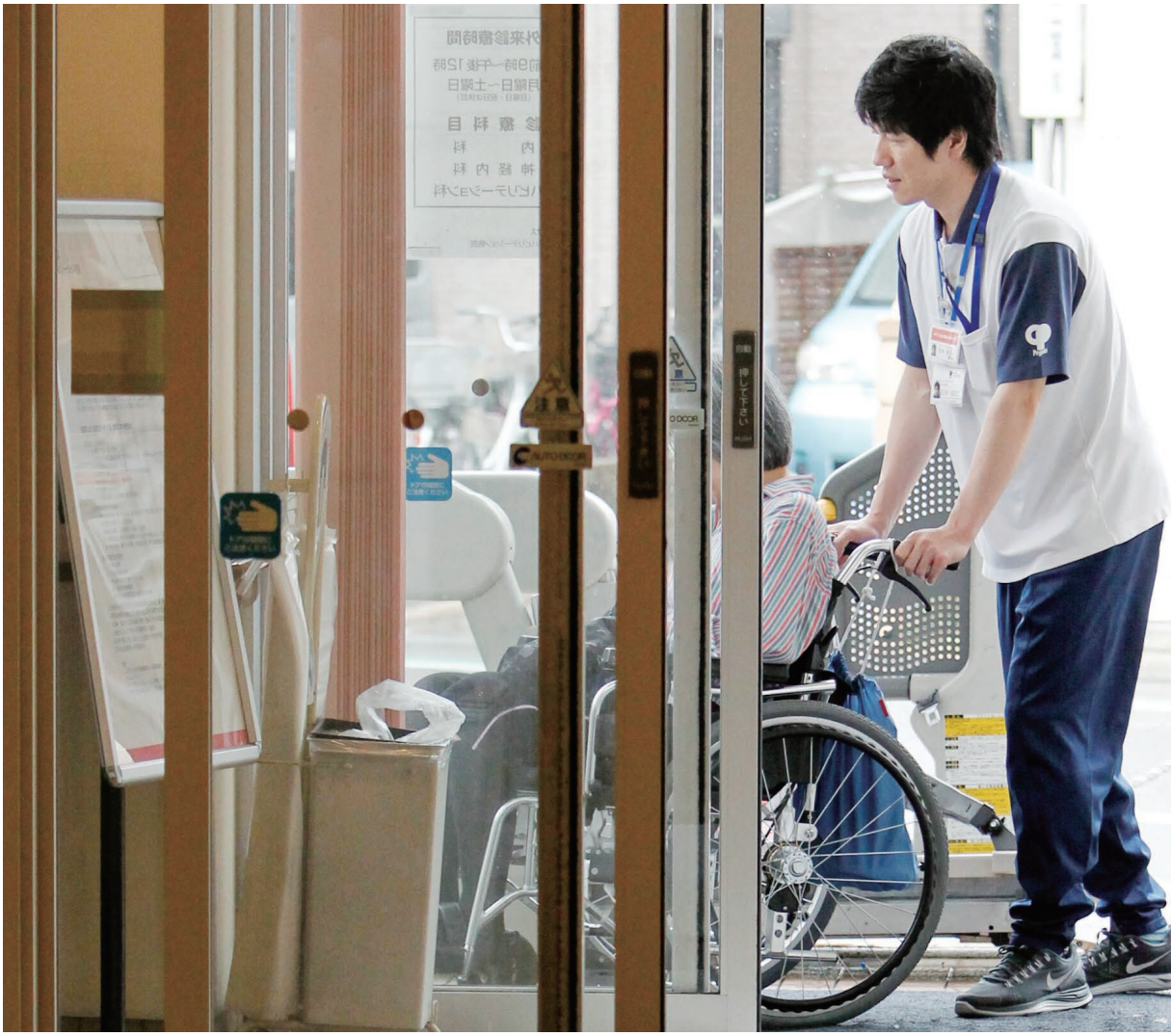
ご利用者に寄り添い、職場復帰をサポート。

吉井が勤務するペガサス通所リハビリテーションセンターでは、午前と午後にわけて、20名ずつ、一日平均40名のご利用者を受け入れている。それぞれの利用時間は3時間。日常生活動作の訓練をはじめ、運動機能や脳力トレーニング、楽しく取り組めるアクティビティまで充実したメニューを用意し、ご本人、ご家族の希望に合わせて個別プログラムを実践している。

そのなかで、吉井はどのようにご利用者の自立支援をサポートしているのか。ある日、センターを訪ねると、片手でネクタイを締める練習をするご利用者のAさん(40代)と、その傍らで熱心にアドバイスする吉井の姿があった。

Aさんは、脳卒中で馬場記

「ご利用者が一日も早く自分らしい生活を取り戻せるように精一杯サポートしています」



「こんにちは。今日も頑張ってトレーニングしましょう」。
さりげない言葉をかけながら、ペガサス通所リハビリテーションセンターを訪れたご利用者を案内する吉井。

ペガサスの介護職員は、病棟や施設にも数多く配置されている。写真は、病棟での仕事風景の一コマ。

念病院に救急搬送された。手術は成功したが、片麻痺の障害が残った。その後、ペガサスリハビリテーション病院を経て、自宅療養へ。週2回、ペガサス通所リハビリテーションセンターに通い、職場復帰をめざし、デスクワークを想定した機能回復訓練に力を注いでいる。「たとえば片手で電話を取ってメモを取るにはどうすればいいかなど、Aさんと一緒に考えながら訓練しています。最初はすごく落ち込んでいたAさんでしたが、できることが一つずつ増えるたびに、表情がキラキラ輝いてきましたね。そのプロセスを共にできることが何よりの喜びです」と吉井はにこやかに話す。

サラリーマンから介護の世界へ。

そもそも吉井が介護の世界に入ったのは、社会人を経験してからだった。大学は経営学部に進んだが、卒業した年は就職氷河期。何とか大手アパレル企業に就職が決まり、百貨店で紳士服の販売に携わることになったが、なかなか売れない。ただひたすら数字を競う職場環境に違和感を感じ、1年半で退職した。その後、携帯電話の販売員などを経て、置き薬の会社に就職。個人宅や会社などへ訪問販売してまわることになり、これが大きな転機となった。

訪問販売を始めた当初、吉井は営業スキルを活かし、薬や栄養食品を「売り込む」ことに懸命になった。しかし、置き薬の個人客は、高齢者や障害を持った人が多い。「足繁く訪問するうちに、お客さまは〈薬がほしい〉というよりも〈話を聞いてほしい〉という気持ちがあることに気づきました。そこで、〈売り込む〉ことをやめて、親身に話を聞いて、そのついでに薬を置いていくような営業スタイルに変更したんです。そうするとお客さまにもとても喜んでいただけて、それが仕事の励みになりましたね」と吉井は振り返る。

また、個人宅をまわるなかで、ヘルパーの存在も知り、吉井は介護の仕事に興味を抱くようになった。「商品販売の仕事はどうも向いていない。それよりも、誰かの役に立ち、誰かに必要とされる仕事がしたい。目先の給与よりも、生涯続けられる仕事を選ぼう」。そう決断した吉井は会社を辞してヘルパー2級（現・介護職員初任者研修）の講習を受け、資格を取得。他法人の通所リハビリテーションセンターに入職した。このとき、すでに30歳間近だった。

アクティビティ中心でいいのか、という疑問。

他法人の通所リハビリテーションセンターで、吉井はご利用者との触れ合いに、営業職にはない充足感を感じていた。同時に、その頃から、もっとご利用者の生活動作を拡大させる訓練をすべきではないか、という思いを抱くようになったという。「前の職場では、理学療法士が一人しかいなくて、リハビリテーションもあまり行き届きませんでした。もっと訓練に力を入れてほしいと申し出て、ケンカもしました」と苦笑する。吉井が独学でリハビリテーションの勉強を

入浴介助は、安全第一。
障害に応じて安全・快適に入浴していただけるよう、入念に準備を行う。

「家のなかを自由に伝い歩きしたい」「一人で散歩に出かけたい」。
ご利用者のさまざまなご希望をしっかり把握し、的確に機能訓練をサポートする吉井。

「ご利用者の方が、生活のなかでできることが一つずつ増えていく。その喜びを、スタッフみんなで分かち合っています」

ペガサス通所リハビリテーションセンターは、退院後ずっと通うのではなく、「卒業」をめざす施設。「ご利用者の自立支援」という目標を、職員全員が共有している。

始めたのも、この頃だ。学んだ知識と技術を少しずつ実践することにより、いっそう仕事のやりがいを感じていった。

やがて、その法人内の異動を機に、吉井は〈違う部署に配属されるよりも、通所リハビリテーションセンターの仕事を続けたい〉と、平成19年1月、ペガサスに入職した。馬場記念病院をバックに控えた施設なら、もっと充実したリハビリテーションを提供できる。そんな期待も抱いていた。

ペガサス通所リハビリテーションセンターが開設されたのは、介護保険制度が始まる4年前の平成8年。地域に先駆けて、退院した患者さまに病院と連続性のあるリハビリテーションを提供する〈場〉を作ってきた。ここでは、身体能力を高める訓練はもちろん、歌や体操などのレクリエーションメニューも用意し、ご本人が自宅に引きこもらず、人と触れ合うことで明るく元気に暮らせるような体制を作ってきた。それから約10年、吉井が入職したとき、ちょうどペガサスでは、医療の変化のなかで、通所リハビリテーションの必要性の高まりを見据え、今まで以上に、自立支援に向けたサービスに力を入れていこうと考えていたのである。

そして、法人本部の主導のもと、吉井は当時の所属長と相談、指示をもとに、プログラムの見直しなどを図っていった。「ご利用者がその人らしい人生を取り戻せるように、これからはもっと生活機能訓練に力を注いでいきたい」。吉井は奮起し、力を注いでいった。

真の意味で、社会復帰をめざす施設へ。

平成19年4月、タイミングよくペガサスリハビリテーション病院が開設され、ペガサス通所リハビリテーションセンターも同院内に場所を移し、新たなスタートを切った。吉井は他のスタッフとともに、生活援助の先に「ご利用者の自立」という目標があることを絶えず意識し、日常生活動作を援助した。たとえば、食事介助一つとっても、単にお

病棟の食事介助では、ご本人のペースを尊重し、できるだけ自分で食べていただくよう、じっくり見守る。

病棟や老人保健施設では、ベッドまわりをきれいに整えるのも介護職員の重要な仕事。清潔な環境で、気持ちよく療養していただく。

世話をするのではなく、その方がどうすれば快適に食事を楽しめるかを見極め、サポートしていく。より良いサポート方法があれば、ご家族にもアドバイスする。「介護職員も看護師もみんなが生活機能訓練に関わるという、地域でも際立った施設になったと自負しています」と吉井は語る。

こうした功労が認められ、吉井は平成20年1月、同施設の管理者に就任した。それから今日まで、吉井はスタッフを一つにまとめ、密度の濃いサービスを提供している。「玄関の敷居は無理なくまたげますか」「トイレまで独りで行けていますか」「じゅうたんが足にひっかかったりしませんか」など、ご利用者それぞれの在宅の環境と困りごとを確かめながら、一つひとつ問題を解決していくサポートの実践は、ご利用者とご家族からも高い評価を得ている。「セラピスト、看護師、介護職員の知恵と技術の環をうまく重ね、また、繋ぎながら、より良いサービスを提供できるよう心がけています」と話す吉井。目標は、「ご利用者の日常生活動作を改善し、一日も早く〈卒業〉していただくこと」だという。なぜなら、通所リハビリテーションは、デイサービスと違い、退院後ずっと通い続ける施設ではない。日常生活動作を拡大させ、自分の生活を取り戻すための通過施設だからだ。「ご利用者とご家族には、ここは〈卒業〉をめざす施設ですよ、ということをお話しします。早く良くなって、自分の人生を楽しんでほしいと考えています」。

めざすのは、監督兼選手のプレイングマネージャー。

プライベートでは、吉井は妻と2歳の子どもの3人暮らし。仕事で遅くなることも多いが、子どもと遊ぶ時間も大切にしている。オンもオフも、吉井が心がけているのは、今日という一日を笑顔で楽しく過ごすこと。その背景には、高校時代に兵庫県西宮市で被災した阪神淡路大震災がある。幸い、家族は無事だったが、クラスメイトの両親のなかには亡くなった人もいた。「明日はどうなるかわからないことを痛感したできごとでした。それから、僕自身、今日を精一杯笑顔で過ごしたいと思っていますし、ご利用者にも、自分で生活する力を取り戻すことで、一日一日を精一杯楽しんで過ごしてほしいと考えています」。そんな思いで、日々の仕事に邁進する吉井だが、管理者なのでデスクワークに追われることも多い。「どんなに忙しくても、ご利用者と過ごす時間は作っていきたいですね。理想は、選手と監督を兼ねるプレイングマネージャーです」と言って、清々しい笑顔を見せた。

管理者になって7年目。吉井はスタッフの働きやすい環境づくりなど、マネジメント業務にも力を注ぐ。

患者さまに近い存在だからこそ、いち早く急変に気づける。

馬場記念病院やペガサスリハビリテーション病院、介護療養型老人保健施設にも、多くの介護職員が活躍している。その一部を紹介していこう。

一人目は、馬場記念病院・回復期リハビリテーション病棟に勤務する松本さつき〈介護福祉士〉。平成5年に入職した、ペガサスにおける介護職員の草分け的存在である。「昔は介護職というと、〈看護師の補助〉というイメージでしたが、だいぶ変わってきましたね。新規の患者さまを迎える際の入棟カンファレンスに私たちも参加し、患者さまの情報を共有しています」。

食事介助、おむつ交換、入浴介助、環境整備など、介護職員の業務は多岐にわたるが、どんなことに気を配っているのだろうか。「私たちは患者さまにいちばん近い存在。〈顔色が悪い〉などの急変をいち早く発見して看護師に伝えるよう心がけています。反対に状態が良くなってきた方については、『そろそろおむつを外して、トイレに行く練習を始めては…』『お風呂に入れそうなので、主治医に相談してみては…』といったアドバイスを看護師にすることもあります。おむつから紙パンツへ。車椅子から歩行器へと、少しずつ患者さまが回復し、早くおうちに帰っていただけるのが何よりの喜びです」と松本は語る。

今、松本が関心を持っているのは認知症ケアだという。「認知症の患者さまが増えてきて、どのように対応すべきか苦慮する場面もしばしばあります。〈認知症ケア指導管理士〉や〈認知症ケア専門士〉といった資格の勉強を始めてみようかと思っているところです」。ベテランになっても前向きに挑戦しようとする松本は、若手の良き模範になっている。

配膳の準備中。こうしたときもPHS（ピッチ）が鳴って、患者さまから呼ばれることも多い。「どんなに忙しくても快く対応するよう心がけています」と、松本はいう。

おむつ交換や体位交換のテクニックしだいで、床ずれは防げる。

続いて、ペガサスリハビリテーション病院の4階（医療療養病床：医療度の高い患者さま対象）に勤務する介護職員を紹介しよう。松浦　睦（介護福祉士）は平成15年入職。回復期リハビリテーション病棟を経て、現病棟へ異動した。「ここは寝たきりの方が多く、回復も見えにくいので、配属当初は戸惑いました。でも、今は全然違いますね。たとえば、〈寝たきりや意思表示の難しい方に、こちらから積極的にコミュニケーションを図っていこう！〉〈時間がかかってもご本人ができることはしてもらおう〉と目標を持って取り組むと、その思いが患者さまにも伝わるんです。振り絞るような声で『ありがとう』と言われることもあり、励みになります」と松浦はほほえむ。

松浦は今、リーダーとしてスタッフの仕事にも目を配る。とくに力を入れて指導するのは、「おむつ交換と体位交換」の技術だ。「おむつをきちんと当てるなど、少し工夫することで床ずれを防ぐことができます。おむつ交換と体位交換の技術は、うちの病棟が一番と自負しています」と誇らしげに言う。

当面の目標は、ケアマネジャーの資格取得。「私は病棟の仕事が好きなので、今のところ転職は考えていません。ただ、ケアマ

「おはようございます。ご気分はいかがですか」。意思表示が難しい患者さまにも、明るく声をかけて介護に取り組むのが、松浦のモットーだ。

「同じ病名でも、お一人お一人、病状は違います。それぞれの障害や性格、年齢などに合わせて、丁寧にお世話をしています」と、田浦は話す。

ネジャーの勉強をすることで、介護保険制度やサービスへの理解を深めて、患者さまやご家族にアドバイスできたらと考えています」と意欲を燃やしている。

初心を大切に、仕事を楽しむ。

冒頭に登場した吉井のように、近年は男性の介護職員も増えてきた。ペガサスリハビリテーション病院3階（回復期リハビリテーション病棟・在宅復帰に向けて積極的にリハビリテーションを行う患者さまが対象）に勤務する田浦嘉隆（介護福祉士）も、その一人だ。

田浦は平成17年入職。コンピュータ専門学校から居酒屋勤務を経て、栄養士の姉のアドバイスで介護の世界に飛び込んだ。まったく違う世界に見えるが、「人と接することが好きなので、介護の仕事はとても楽しいですね。入浴後に『気持ちよかった、ありがとう』と言われたりすると、やりがいを感じます」と話す。

Eye's of Pegasus

介護職員のキャリアパス

介護職が専門職として確立されたのは、昭和62年に「介護福祉士」の国家資格制度ができてからである。その後、「自立支援」が介護の基本理念として掲げられ、平成12年の介護保険制度創設とともに、自立支援を支える介護職が一般にも広く受け入れられるようになってきた。

介護職そのものの歴史が浅いために、介護職員のキャリアパスの仕組みは発展途上にある。しかし、ペガサスでは早くからその整備を図り、必要な資格取得を支援。介護職員がそれぞれの人生のなかで将来ビジョンを描き、モチベーションを維持しながら働き続けられるようサポートしている。

また、超高齢社会を迎え、在宅医療の充実が急務となるにしたがい、介護職の仕事の領域も拡大される方向性にある。たとえば、平成24年4月、法律が改正され、介護職員などがたんの吸引、経管栄養（胃ろう・腸ろう、経鼻）などの医療行為を行えるようになった（原則として一定の研修を修了し、都道府県知事より認定証が発行された者に限る）。さらに、介護福祉士の一つ上位の資格として「認定介護福祉士」の新設も検討されており、社会的にも介護職員のキャリアパスを支援する気運が高まっている。

ペガサスにおける介護職員の資格とキャリアプラン

専門資格・役職	内容
介護職員初任者研修（元・ヘルパー2級）	介護に携わる基本を身につけた、介護職の入門ともいえる資格。
介護福祉士（国家資格）	高齢者や障害者の暮らしを支え、自立に向けた介護を実践する者。
介護職員のリーダー	現場の介護職員を束ね、業務全体を管理するリーダー。
施設管理者	通所リハビリテーションセンター、デイケアセンター、ヘルパーセンターなどの管理者。

仕事をしながら取得をめざすことのできる、専門資格

介護福祉士（国家資格）
介護全般の基本を身につけ、病院、介護施設、在宅等での療養者の暮らしの援助を行う者。

ケアマネジャー（介護支援専門員／国家資格）
要支援・要介護認定を受けた人の相談に応え、ケアプラン（居宅サービス計画）を作成し、他の介護サービス事業者との連絡、調整などを行う者。

認知症専門職
「認知症介護指導者」「認知症ケアの専門士」などの資格を有し、認知症介護の専門家としてチーム医療に携わる者。

ペガサス認定機能訓練士
日常生活動作の訓練に関する専門知識・技術を身につけ、スタッフを指導できる者。

介護福祉士の資格は、入職後に取得した。「ペガサスで週に1回、勉強会を開いてくれたんです。看護師やセラピストの皆さんが交代で専門知識を教えてくださり、そのおかげで無事に合格できました」。その後も、田浦はペガサス主催の研修に熱心に参加している。「スキンケア、感染予防、床ずれ予防など、いろいろなテーマで学んでいます。初心に帰るためにも、できる限り参加して、介護技術を再確認しています」。家庭に帰れば、4歳児と1歳児の父として、育児にも積極的に協力する田浦。「これからも介護現場で働きたいですが、40代、50代に向けて、どういうキャリアプランを描いていくか、考えているところ」だという。

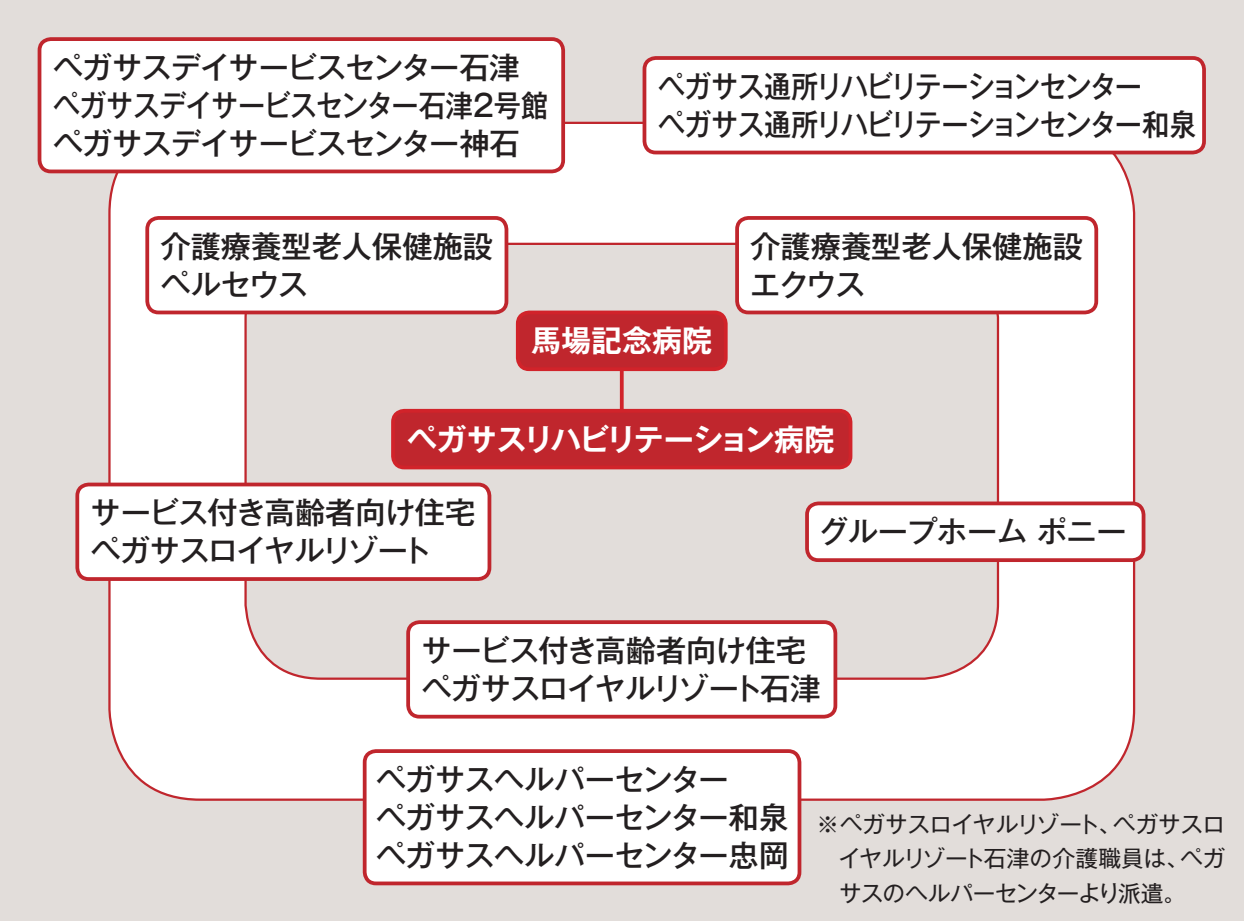
介護のプロ意識を常に忘れずに、スタッフを束ねていく。

最後に紹介するのは、介護療養型老人保健施設「ペルセウス」に勤務する堀 晶子（介護福祉士）である。ペルセウスは病院を退院後、在宅復帰や次の施設に入所するまでの期間、入所者をサポートする中間施設だ。

堀は平成16年、馬場記念病院に入職。ペルセウスの開設と同時に異動してきた。「入職当初は体力的にしんどくて、10年も続けるとは思いませんでした」と笑う堀。堀が〈介護のプロとは何か〉を意識し始めたのは、現在の直属の看護師長に出会ってからだという。「師長の口癖は、〈きれいにしなさい〉。ご本人がベッドから車椅子に座ったときに布団を三つ折りにするなど、本当に小さな積み重ねなんですが、環境を整えると気持ちよく過ごしていただけます。当たり前のことを当たり前にできて初めてプロといえる。そう意識するようになり、仕事が楽しくなりました」。

平成26年5月、介護職員のリーダーとなり、堀の仕事へのモチベーションはさらに上がった。リーダーとして最初に手がけたのは、業務改善だ。「スタッフ会議を開いて、みんなの意見を業務の仕組みに取り入れました。今は日勤と夜勤の引き継ぎなど、とてもスムーズにいっています。また、転倒防止や日常生活動作の拡大にも意欲的に取り組んでいます」。たとえば、歩行訓練の成果が見られた方には、お風呂まで歩いてもらうなど、生活のなかにリハビリテーションを取り込む工夫を欠か

ペガサスにおける介護職員配置



※ペガサスロイヤルリゾート、ペガサスロイヤルリゾート石津の介護職員は、ペガサスのヘルパーセンターより派遣。

スタッフと一緒に、ご利用者の体位交換を行う堀。
この夏、開催される介護職員の研修会では、事例発表を行う予定だ。

さない。「生活動作向上の中心は、私たちですから」と、堀は意欲を見せる。

介護職員はチーム医療の一員。

現在、ペガサスには約300名ほどの介護職員が勤務している。ここまで見てきたように、その職場は病院、通所リハビリテーションセンター、介護療養型老人保健施設など、実にさまざまだ。なお、今回は取り上げなかったが、在宅の現場で各家庭を訪問している介護職員もペガサスヘルパーセンターに数多く在籍している。

それらの介護職員は、現場においてどういう役割を果たしているのか。社会医療法人ペガサス法人本部企画運営局の局長・田中恭子（馬場記念病院事務部長）に話を聞いた。「介護職員は施設のなかでも在宅でも、チーム医療の一員です。その役割としては、日常生活援助はもちろんベースにありますが、患者さまやご利用者の残存能力を引き出し、自立へ促すプロセスをめざすことが重要な使命になります」。

病院の介護職員はともすれば、看護師の補助職と思われがちだが、「それは間違った認識だと思う」と田中は明言する。「介護職員には、介護職員だからこそできる患者さまやご利用者へのサポートがあります。だからこそ、回復期リハビリテーション病棟などでは、多様な職種が集まるカンファレンスにも介護職員が参加しているわけですし、チーム医療の一員として基本的な医学的知識も必要だと考えています」。

医療のわかる介護職員を育てたい。

介護職員の医学的知識を向上させるために、ペガサスでは、感染予防、褥瘡（じょくそう）予防など、職員全員を対象とする勉強会に介護職員も積極的に参加している。また、それぞれの現場においては、看護部主催で介護の勉強会を開催しているほか、病院や施設に勤務する介護職員のリーダー主催の研修会が平成26年夏からスタートする。ここでは合計4日間（1日に午前と午後の2回ずつ）にわたる大規模な研修会になる見通しで、リーダーたちはその準備に追われている最中だ。臨床現場での体験に基づき、ペガサスの介護職員全体のレベルアップを図る計画である。

また、在宅分野においても、ペガサスでは早くから、医学的知識をベースにしたホームヘルパー研修（現・ペガサス介護職員初任者研修）を継続的に行ってきた。その狙いについて田中は次のように語る。「在宅では医師や看護師がいないところで生活援助するわけですから、病気の再発防止や急変察知への意識を高く持ち、医師や看護師に繋ぐ役割を担ってもらわなくてはなりません。医療のこともある程度わかり、ご家族の気持ちも理解してサービスを提供できる。医療とご家族を繋ぐ質の高い介護のプロを一人でも多く育てていきたいと考えています」。

地域医療と介護を語る。

これからの地域医療において介護職の充実が重要な鍵を握っている。

社会医療法人ペガサス 理事長（馬場記念病院 院長）
馬場武彦

在宅の生活を支えるのは介護のマンパワー。

ペガサスでは、医療を核として、地域社会で必要とされる介護・福祉サービスの拡充を進め、疾病予防から在宅支援に至るすべてを包括する「ペガサス・トータル・ヘルスケアシステム」の構築をめざしている。それは国が今、超高齢社会を迎え、医療・介護・介護予防・福祉などを包括的に提供する「地域包括ケアシステム」を構築しようとしている動きとまさに合致するものだ。「私たちがこれまでめざしてきた方向は間違っていなかったと改めて感じています。そして、高齢化の進展に伴い、介護・福祉サービスの充実にいっそう力を入れなくてはならないと考えています」と語るのは、馬場記念病院の院長であり、社会医療法人ペガサスの理事長の馬場武彦である。

65歳以上の人が総人口に占める割合のことを「高齢化率」というが、ペガサスのある堺市では平成24年9月末現在の高齢化率は23・4％で、その後も上昇傾向にある。とくに高齢者人口のうち75歳以上の増加が著しく、高齢者人口の約43％が75歳以上の後期高齢者となっており、その増加に伴い、要介護者数も増えている（堺市ホームページより）。

「病院を中心に考えると、急性期医療の質の向上が第一の課題になります。しかし、地域に住む方々にとって、病院を利用するのはほんの一時期のこと。高齢者の在宅での生活支援が必要ですし、その部分を担うのは圧倒的に介護のマンパワーです。ペガサス・トータル・ヘルスケアシステムの構築をめざす上でも、これからは介護がキーポイントになると考えていま

す」と馬場は話す。

介護職員のやりがい、働きやすい環境づくりに力を注いでいく。

超高齢社会をにらんで、ペガサスでは早くから介護職員の育成と活用に力を注いできたが、その取り組みを今後さらに加速させていく方針だ。

「介護職員の育成でもっとも重視しているのが、モチベーションの向上です。介護職員初任者研修の資格を持って入職した人が介護福祉士の資格を取得できるように、法人では勉強会などを設けて支援しています。ペガサス認定機能訓練士を開設したのも、介護職員のプロ意識を高め、患者さまやご利用者に、ペガサスの介護職員の高度な専門能力を認識していただくことが狙いとしてあります」と馬場は語る。

介護職員のなかには、介護福祉士からさらにケアマネジャーなどへとキャリアアップを図る者もいる。「それぞれが自分の人生設計に合わせて、ステップアップしていってほしいし、法人としても精一杯サポートしていくつもりです。同時に、長く働き続けられる環境を整えることも大切だと考えています」と馬場は言う。たとえば、子育て世代の介護職員の増加に対応した、福利厚生制度の充実もその一つだ。ペガサスには、結婚・出産を経て働き続ける職員（主に看護師）を支援するための院内施設として、ペガサス保育所（未就学児対象）、ペガサスキッズルーム（小学生対象）がある。その利用枠を平成26年度から介護職員に広げることで、女性が子育てをしながらでも無理なく働けるよう支援している。

「今後は、今まで以上に、要支援・要介護の認定を受けた入院患者さまが増え、地域においても、生活援助の必要な方が増えていきます。医療と介護は決して分離できる問題ではなく、必要な医療・介護サービスを一体的・継続的に提供していかねばなりません。私たちはこれからも医療と介護の両面で職員の育成と活用に力を注いでいきます」。馬場は、公益性の高い社会医療法人としての使命感を持ち、地域に必要な介護の力を育てていく考えである。

Second edition

医療から、そして、看護、介護から、地域社会を支える人々。

ペガサスは、地域の診療所、そして、看護、介護に関連する事業所と連携をしています。
診療所は、地域の皆さまにとって、医療を受ける「最初の窓口」。丁寧な診察による適切な診断・治療を行い、また、病院の紹介を通して、患者さまの「かかりつけ医」として、健康状態を総合的に管理してくれます。
看護、介護に関連する事業所は、在宅で療養する皆さまの「パートナー」。
ご本人はもちろん、ご家族の毎日を支えたり、快適な生活の場そのものご提供により、皆さまを支援します。
第二特集では、こうした診療所、事業所をご紹介していきます。※診療所（アイウエオ順）、そして事業所の順でご紹介しています。

在宅療養診療所として、患者さまとご家族の生活をトータルに支え続ける。

診療所

地域のすべての人にこの町で暮らし続けてほしい。

なんでも気軽に相談できるアドバイザーとして。

平成5年堺市堺区に開院し、20年余りの歴史を積み重ねてきた「たつみクリニック」。巽 雄三院長は大学では婦人科を専攻し、勤務医時代には小児科や外科、整形外科、救急医療に従事し、幅広い診療科にわたり診療経験を積んできた。「病院に勤務していた頃は、医師の総合性よりも専門性が脚光を浴びていた時代。でも、私自身は患者さまを総合的に診る地域のかかりつけ医になりたくて開業しました」と巽院長は振り返る。

診療で大切にしているのは、「患者さまとの会話」だ。「お話や訴えをしっかり聞いて、こちらからもいろいろお話しします。本音で話し合える雰囲気づくりを大事にしています」。自分が病気かどうか気になったとき、どの病院でどんな検査を受けるべきか、自分ではなかなか判断できないもの。そんな相談にも、巽院長は気軽に応じている。「患者さまを総合的に診て、必要に応じて適切な病院を紹介しています。患者さまの良きアドバイザーとして、地域医療の窓口のような役割を担っていきたいと思っています」。

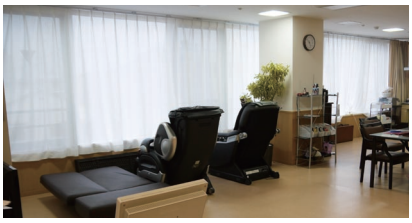
また、訪問診療・訪問看護・訪問リハビリテーションに力を注いでいるのも、たつみクリニックの大きな特徴だ。院長の他、非常勤医師2名を加えた3名の医師が、看護師とともに、24時間・365日の体制で病状変化に対応。必要に応じて理学療法士なども訪問し、患者さまの日常生活動作の改善を促している。さらに、がん末期など、終末期を迎えた患者さまが、住み慣れた自宅で過ごせるように、痛みや苦しみを緩和する緩和医療にも取り組み、在宅での看取りに幅広く対応している。

医療と介護を連携し、最期まで支えていく。

たつみクリニックでは、早くから医療と介護サービスの連携の必要性を察知し、別会社を設立して居宅介護事業にも積極的に取り組んできた。その背景には、「病気を治療するだけでなく、患者さまとご家族をトータルに支え、最期まで住み慣れた自宅、この町で安心して暮らしていただきたい」という巽院長の強い思いがある。

そして、そんな院長の念願ともいえる複合的な医療・介護施設が堺市西区に平成26年5月にオープンし、たつみクリニックもそこへ移転した。地上4階

建ての1階にはたつみクリニック、2階には通所リハビリテーション、3階にはサービス付き高齢者向け住宅（サ高住）「たつみ村」を開設した。たつみ村のキャッチフレーズは〈生きる。を支える医者の家〉。「訪問診療するなかで、在宅では看取れないし、かといってご本人は入院もしたくない、というケースをたくさん診てきました。そういう方々の受け皿になればいいなと考えています。〈医住接近〉の良さを活かし、医療依存度の高い方を積極的に受け入れています」と、巽院長は説明する。また、たつみクリニックでは病室も備え、在宅療養中の患者さまの急性増悪にも迅速に対応していく構えだ。地域の人たちが最期までこの町で暮らしていけるように、巽院長はこれからも在宅療養の支援機能を強化していく方針である。



たつみクリニック
院長：巽 雄三
所在地：大阪府堺市西区浜寺石津町中1-547-2
TEL：072-243-0320
診療科目：内科、婦人科、小児科、外科、リハビリテーション科

どんな悩みや心配ごとでも気軽に相談できる「心のかかりつけ医」をめざして。

診療所

心の病んでいる人、心身ともに疲弊した人の力になりたい。

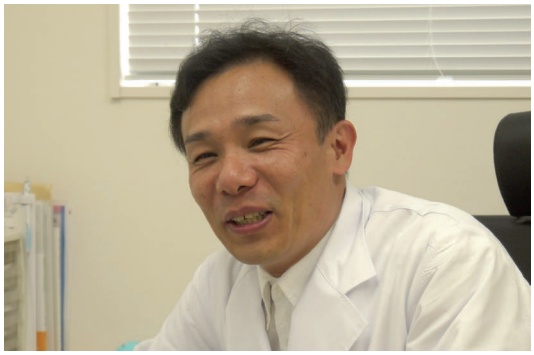
患者さまの立場で心の声を聞き取る。

平成26年2月にオープンした、なかい心のクリニック。JR阪和線「鳳」駅東口から徒歩3分ほど、四葉のクローバーとひよこのマークをあしらった看板が目印だ。院内に入ると、ひろびろとした落ち着いた空間が迎えてくれる。車椅子やベビーカーでもそのままスムーズに移動できるよう、フロアはバリアフリー設計。木目の風合いを活かしたフローリングが敷き詰められ、一歩足を踏み入れるだけで、心地いい空気感に包まれる。

中井啓輔院長は、大学卒業後、病院の救急部、救命救急センターに9年間ほど勤務した後、精神神経科へ進み、豊富な診療経験を積んできた。「救急医療に携わっていたとき、神経疾患の患者さまが多くいらっしゃることを知りました。心の病んでいる人、心身ともに疲弊した人の力になりたいと考え、この道に進みました」と、院長はおだやかに語る。一刻を争う救急医療とは違い、患者さまと落ち着いて話をしてじっくり治療できるところにも精神神経科の魅力を感じたという。その思い通り、中井院長は今、患者さま一人ひとりにできるだけ時間を割き、患者さまの立場になって考え、よく話を聞いて、丁寧な診療にあたっている。

臨床心理士によるカウンセリングも実施。

オープンから5カ月ほど過ぎて、これまで訪れた患者さまは延べ400名弱。思春期を迎えた10代前半の若者から80代の高齢者まで、年齢層は実に幅広い。「ちょうど当クリニックのオープンが、環境が変わる春先だったので、新しい職場や学校になじめずストレスを抱えた方が大勢来られました。ストレス社会のなかで、憂うつ、無力感、無気力、悲哀感、絶望感などを訴える方が増えていると感じています」と中井院長は話す。



なかい心のクリニックが対象とする疾患は、不眠症、自律神経失調症、うつ病、適応障害、パニック障害、認知症など多岐にわたる。そのなかで、専門的な検査・治療が必要な場合は、速やかに馬場記念病院など近隣の病院に紹介している。「たとえば、認知症などの場合、脳に障害があって発症することもあるので、当クリニックだけでは確定診断できません。そんなときは病院で精密検査を受けていただいています」と、中井院長。長年救急医療で培ってきた初期診断能力が、いかんなく発揮されているといえるだろう。

また、心理療法、精神療法を重視した診療を行うために、2名の臨床心理士を迎え、週に2回、心理相談・カウンセリングを行っている。診療室とは別に、落ち着いた雰囲気の相談室を設け、個人のプライバシーにもきめ細かく配慮している。「悩みや心配ごとを気軽に打ち明けていただける環境づくりに力を入れていきたいと考えています。自分一人で抱えていた悩みを誰かに話すだけで、心がすっきり晴れることもあります。これからも臨床心理士によるメンタルケアサポートに力を入れ、どんなご相談でも気軽に来てくださるメンタルクリニックに成長していきたいですね」と中井院長は抱負を語った。

なかい心のクリニック
院長：中井啓輔
所在地：大阪府堺市西区鳳東町2-183-5
TEL：072-284-7611
診療科目：精神科、心療内科

キリスト教の精神をバックボーンに、高齢者の生活にやさしく寄り添う。

事業所

介護と医療の連携を大切に幅広いサービスを提供。

高齢者の心と魂のケアを大切にして。

平成11年、俣木泰三社長が自宅のリビングを開放して介護事業を始めたのが、やすらぎの介護シャロームの始まり。その後、次々と事業を展開し、訪問介護、居宅介護支援、デイサービス（通所介護）、訪問看護リハビリ、グループホームや有料老人ホームの運営まで多岐にわたるサービスを提供。現在、シャロームの拠点は堺市を中心に10カ所に広がっている。

「シャローム」の名前は、聖書にある言葉で「心に平安がありますように」を意味する。俣木社長は敬虔なクリスチャンであり、シャロームの名前が示す通り、同社の事業運営のバックボーンには「キリスト教の精神」が息づいている。「キリスト教の愛や奉仕の教えを基本に、安心で誠実な、満足いただけるサービスを、心を込めて提供しています」と、俣木社長。とくに得意にしているのは、「スピリチュアル（精神的・霊的）なケア」だという。「人は、肉体と精神・魂で成り立っています。肉体を治すのは医療ですが、精神や魂を癒すのは私たち介護の役目。ご利用者のお宅を訪問するときも、施設でお世話するときも、スピリチュアルなケアを第一に考えてお一人お一人に接しています」。

介護と医療が手を携えてやすらかな日々を見守る。

シャロームの提供するサービスは、前述したように、介護領域だけにとどまらず、訪問看護リハビリといった医療分野にも広がっている。その狙いについて、「ご自宅で自分らしく暮らしたい、という方々を支えるには、介護だけでなく、医療との連携が欠かせません。地域の診療所の先生方と連携することで、24時間・365日体制でサポートさせていただいています」と俣木社長は話す。

有料老人ホーム「晴れる家」では、看取りケアにも力を注いでいる。「入所されるときに、最期の時間をどこで過ごしたいか、ご要望をお聞きします。『病院ではなく、慣れ親しんだ施設で気心の知れたスタッフたちに見送ってほしい』という方には、病状の変化に応じて必要な医療サービスを追加しながら、最期まで心やすらかに過ごしていただけるよう職員全員が心を尽くしています。ご家族との交わりが少ない方でも、決して〈寂しい思いはさせない〉ことが何よりも大事だと考えています」と、俣木社長は強調する。

病院から在宅へと医療体制の比重が変化するなかで、シャロームは医療と介護の連携を強化していく方針だ。「以前は、病院と在宅に距離感がありましたが、これからは今まで以上に連携が大事になります。病院を退院された方のフォローも、私たちの重要な役目になりますし、病院や診療所の先生方といい関係を築いていきたいですね」と語る俣木社長。15周年を迎え、シャロームはますますサービスを充実させ、この地域に安心の在宅療養ネットワークを築いていこうとしている。

つばさ 45
2014年夏号
平成26年7月発行第13巻第1号
（通巻45号）
地域医療を考えるペガサス情報誌

発行人　馬場武彦
編集長　塚本賢治
編集　ペガサス広報委員会　編集グループ
発行　HIPコーポレーション
社会医療法人ペガサス　〒592-8555　大阪府堺市西区浜寺船尾町東 4-244
TEL 072-265-5558　http://www.pegasus.or.jp/

やすらぎの介護シャローム
運営会社：シャローム株式会社　代表取締役：俣木泰三
住所（本社）：大阪府堺市堺区大仙中町6-24　TEL：072-243-4640
業務内容：介護保険サービス事業、障害福祉サービス事業、介護タクシー事業、その他介護・福祉に関する事業、介護予防事業

つばさ 45
地域医療を考えるペガサス情報誌

超高齢社会を見据えて、
厚生労働省は、地域包括ケアという考えを示しています。
これは、高齢者が重度の要介護状態となっても、
安心、安全に、住み慣れた町で、住まいで、
暮らし続けることができる支援体制をいいます。
そして、そのためには、
地域の診療所や病院、介護サービス事業所等が一体となり、
地域の生活を支えることが必要とされています。

医療と介護の一体化は、地域を挙げて取り組まなくてはなりません。
しかしながら、医療と介護の担い手は異なります。
すなわち、どちらも専門性の高い領域ではありながら、
そこにどうしても断層が生まれます。
私たちペガサスは、その断層を埋めるために、
介護職員には医療の視点への教育を、
また、医療従事者には介護の視点への強化を図ってきました。
そして、介護職員とリハビリテーションスタッフ、
介護職員と看護師、といった具合に、
相互関連の強化にも努めてきました。
今回の『つばさ』でご紹介したのは、その一例です。
これからもペガサスは、医療と介護の一体化に努め、
地域の総和で、
高齢になっても安心、安全に暮らすことができる環境の整備に、
全力を注いでいきます。

社会医療法人ペガサス　理事長　馬場武彦

社会医療法人
ペガサス
Pegasus